るんですね。ボールを下に落とすと、弾き返してきますよね――こういう事なんですよ。上から物を落とせば跳ね返る。こうやれば、一番よく分かりますよね。

そうすると、人に意地悪したら、今度は自分が意地悪されるんですよ。それは、今はされないかもしれない。しかし、こうやってズーッと転生を繰り返してる中で、何処かで必ずやられるんですよ。

「わたしゃ、やられたっていゝわ」って、やって貰いたいという人は、話は別――。

そうすると、今、自分は人々にどういう事をしているのか。生まれて来た中で、私達のやるべき事は――人に幸せを提供する、人の為に少しでもお役に立てるような生活をする――そういう事ですね。

一六、己が己自身を裁く――閻魔大王は自分の心の中に

やはり私達は、ただ勝手に世の中にいるんじゃないんだということですね。

ところが、本当の事が分からなくなってきて、どうしてもそのようになってくる。

そして、私達は死んでしまったら、この世の中なんて全然関係が無いんですよ。関係が無い――。関係あると思ったら大間違いですよ。

皆さん、今日の午前中はもう無いんですよ。午前中の事を振り返っても、何もならないですね。

自分の心を正す為に振り返る――これは善い事ですけどね。

しかし、振り返って、過ぎた事に拘ってご覧なさい、おかしくなるから――。

そのように、私達は生きている中で、もう振り返る事は出来ないんですよ。どんどん……進んで行きますね。前進して行くだけなんですよ。しかも、今というものを土台にして、前進していくんですね。

そうしたら私達は、振り返るという事は、執着なんです。執着――。念を置く事。

しかし、この世を終わっても、この物の事を思っている訳です。しがみ付いて離れない。お金でもダイヤでも、自分のものだと錯覚を起こして、札勘定をしている人もいる訳ですね。

あの世に行ってご覧なさい。この肉体から、魂がサーッと出て行ったら、沢山の物を捨ててある処がある。私はそんな処はあるまいと思ったら、本当に捨てる処があるんですよ。もう宝石とか指輪なんていうものは、物凄い数ですよ。ダイヤでもルビーでも何でもある。みんな欲しかったら、あそこに行ってご覧なさい、只で拾えるから――。拾ってきたら、お金持ちになりますよ。（笑）その代わり、拾ったら後が大変ですけどね。（笑）

そうでしょう――この世でも、お金のある女の人は、宝石のいゝのを持っているでしょう。私がお会いした女性で、一〇本全部の指に、ザーッと指輪をしている人がいましたよ。（笑）全部、プラチナ・金・ダイヤが入ってる。

「先生、母が病気で、家で寝ているんですけれども、来てみて戴けませんでしょうか。是非、心の話をして貰えませんでしょうか」

と、初めての人だったんですけど、知っている人の紹介で、その人の親戚でしたから、まぁ、断る訳にもいかないし、行った訳です。

私は、何だか知りませんけど、御殿のような家にばっかり呼ばれて行くんですよ。

何だか自分の家がみすぼらしくてしょうがないですね。（笑）

大きな会社の社長さんの家です。枕元に大きな金庫が置いてあって、そこに寝ておられた。

「おばあさん、どうですか……」

と、いろんな話をして、ふとお婆さんの指を見たらザーッとしてる訳ですよ。

「あっ、おばあちゃん、その指輪、全部おばあちゃんの？」

「はい、私のです。枕元の金庫にも沢山入っております」

――もうこれはお終い。（笑）人にやりたくないそうですよ。

「おばあちゃんね、それ捨てなさいよ、わたし貰って帰りますから」って言ったら、怒られちゃうよね。（笑）怖いですねぇ……。これじゃあ、心の話は通じないですね。

人間は前進して行く訳ですから、この物質の世から、物質でない世界に行かなくてはならない。

何処にあるんですか？――我々がこの世を終わったら、高橋先生の話にあるように修養所という処があるんですね。終わった人は、みんなその修養所に行く訳です

よ。そこで、この物の中（この世）での、自分が今までの思った事・行った事を反省をする訳ですよ。

そして、その反省によって、「あっ、私はこんな事をしていた。これをそのまんまにしてきてしまった」と気が付く。――そのままにしてきたということは、これをもう一度やり直さなくてはいけない訳なんですね。そして、行く処が地獄なんですね。

まぁ、地獄と言ったら、閻魔さんがいてね、

「おまえ、嘘を言ったか」

「いやぁ、嘘は言った事ありません」

「舌出してみろ」

「おまえ、嘘、言ったじゃないか！」

ペンチで、ヤッ！と舌を抜く。――あんなものは無いんですよ。

あの閻魔大王は、自分の心の中にある訳ですよ。自分の心が自分を裁く。

ところが、この修養所まで行ける人は良い訳ですよ。まぁ〳〵修養所どころじゃない、自分の持っている物を捨てるのに精一杯なんですね。

私はそこに行って観てきた中で、一番大きな物は、お寺の釣鐘――。あれは何処から持って来たのか……まさか弁慶じゃないですよね。（笑）やっぱり、お坊さんが大事な釣鐘を置いていきたくなかったんですかねぇ……。

で、途中までは持って来たんだけども、弁慶のような具合にはいかなくて、置いていったんじゃないでしょうか。いやまぁ、でっかいのをよく持って来ましたよね。

そのように、捨てる処が、ちゃんとある訳です。持って行こうとすると、重いから、そこでみんな捨てる訳です。

そして今度は、物だけでは無い。この世にみんな想いを置いていく訳ですよ。

一、あゝ……恋しい人、別れたくない人もいるかもしれない。

一、これは、わたしの物だけど、あれは誰が持っていくかな。

一、わたしは財産残したけど、遺書に名前を書いた人は受け取るかな。

一、遺書も何にも書いてこなかったんだけども、あれは誰が持ってくのかな。

――そう思って死んだら、その物にちゃんと掴まっている訳ですよ、想いが……。

先程の一〇本の指輪じゃないですけど、死んでそういう物が残ると、身内の人が集

まってきて、「これ、私が貰っていく」、「いや、私が貰っていく」と、もう喧嘩ですよ、ワーワー……。そんな物、指にはめてご覧なさい、病気になるから――。

そういう財産の事で争いが始まった時には、「あっ、これは死んだ人がやってるぞ」と思っていゝですよ。よーく参考に知っておいた方がいいですよ。

亡くなった人が、本当に執着から離れたら、財産争いなんて一切起こらない。

財産が、どんなに多くても、どんなに少なくても、争いはやってはいけませんよ。やはり、欲望を持ったらきりがないんですよ。

告別式の時に喧嘩が始まる事があるでしょう。告別式の時に喧嘩なんかしてる時には、あれは、お化けが横で、「やれっ、やれっ」て言ってるんですよ。

それから、人が亡くなった時に、告別式でワァワァ泣くというのも本当はおかしいんですね。――本当はですよ。だけど人間、感情がありますからね、これは泣く事は当然ありますよね。

「長い間、ご苦労様で御座いました、お世話になりました。また、縁があったらお会いしましょう」と、暫くの間、サヨウナラ……。本当は、これがお別れなんですよ。

私達の人生というものは、魂として、会う事と、別れる事の二つしかない訳です。

本当は、悲しい別れをしてはいけないということです。悲しいという事は、やるべき事を、ちゃんとやらないで帰ったから、悲しい事になる訳ですね。悲しんではいけない。

しかしそれには、自分の心というものをちゃんとしておかないと、どうしてもそうなってしまいますね。

――次回に続く

次回『一七、亡き父母の心によせて』の更新予定は、5月の第1週です。

お楽しみに。